
270分

駈牙 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

270分

【Nコード】

N9183Y

【作者名】

駆牙 蓮

【あらすじ】

オペ室看護師である成海大和ナルウミヤマトは、親友であり同期の看護師の進藤シンド雅樹ウマサキに報われない恋をしている。長年の友情を壊したくないが、苦しい想いは募っていき。

「 始業時間一分前」

寝癖もろくに直さないままいつも通り青い帽子を被り、出勤簿のソフトの入ったパソコンをクリックする。そんな俺の横で笑いながら画面を覗き込むのは、同期の進藤雅樹。通称マサ。高い身長と、それを持って余した様な猫背が印象的だ。

「・・・間に合えば何時でも一緒だったの」

俺は成海大和。通称ナル。マサとは同期の看護師だ。看護師と言っても病棟ではなく手術室で働いている。

「ナルんところは今日何のオペ？」

「スパイン」

「・・・ダリいな。頑張れよ」

「おー」

マサは大学時代からの付き合いで、かれこれ七年目だったりする。そして三年越しの俺の不毛な片想い。

女ばかりの看護学部だったから、マサと仲良くなるのに時間はかからなかった。一緒にバスケット部入って、毎日バカやって。彼女いる時もマサという方が楽しくて、それが原因で喧嘩したりフラれたりもした。だから誰と付き合ってもいつも長続きしない。

それに比べて、マサはもう彼女と五年も続いている。二つ下のバスケット部のマネージャーだ。俺の不毛な恋は、今年同じ職場にマサの彼女が就職してきた時点で更にどん底だった。

「・・・移動希望出そうかな」

「何か言ったか？」

患者の入室を入口で待ちながら呟いた独り言が、同じくすぐ近くで待機していたマサに聞かれていた様だ。

「何でもねーよ」

毎日毎日、腕の悪い外科医に偉そうに怒鳴られたり、更年期の口煩い上司に嫌味を並べられたり。　　いい事ねーよなあ。

「あ、そうだ。今日金曜だろ。明日勤務じゃねーよな。飲みに行かね？」

「・・・お前のカノジヨに怒られねえの？」

「そう言っつて、ナル全然遊んでくれなくなっただろ。今日はバスケット部に顔出して、そのまま飲むぞ。な、決まり」

目を細めて笑うと、マサはそのまま入室してきた患者を連れて担当の手術室に向かって行った。

いい事も、あるもんだな。

この気持ちが無毛な物である事には変わらないのだが。それでも、一番大事な同性の友人と思っってもらえるだけで。それだけで俺は十分なんだ。

酒は、驚く程早く身体にまわっていった。

「ナル、大丈夫か？」

大丈夫、じゃない。激しい運動の後、しかもかなりの空腹。さらに喉の渇きが勝って酒をどんどん流し込んでしまった。

日々の仕事のストレスと最近の睡眠不足。あとは久しぶりにマサと飲んでる事。全てが悪い方向に行ってしまった様だ。

「・・・気持ち悪い。頭も痛てえ」

「もう帰るか。代行呼ぶからちよっと待ってるよ」

言ってマサが立ち上がる。

もう無茶をして酒に漬れる歳でも無いのに。何よりせっかくのマサとの飲みだったのに。情けなくて涙が出そうだ。・・・呆れられたかな。いや、呆れられて当然だろ。

反省点は山ほどあるが、とりあえず今は横になりたい。なんだか寒気もしてきた。明日が土曜で本当によかった。

「ナル。代行来たから。鍵出せるか？」

「ん・・・」

店までは俺の車で来たから、帰りは代行でマサン家回りで降ろして帰る予定だった。

車までマサに支えられながら覚束ない足どりで向かう。・・・慣れた車の振動がひどく気持ち悪い。

「ナル。お前らしくねーなあ。本当に大丈夫か？ただでさえ最近様子おかしかつただろ」

・・・バレてる。そりゃあお前とお前の彼女が一緒に働く所なんて見たくないに決まってるんだろ。でも今は言い訳する元気もねーから。

「あつ、すみません。一人ここで」

マサの話し声が聞こえる。ああ、もう着いてしまったのか。目を

開けるのも喋るのもしんどいから、もうこのままでいいや。若干夢か現実かも分からないし。

「 やっぱり、ここで二人降ります。停めてください」

「・・・ん？」

「ほら、エレベーターまで頑張れって。ナル、そんなデカイ身体は担がねーぞ」

何でマサン家に？まあいいや。もうどうでも

翌朝、目が覚めると二日酔いらしい頭痛と、何故か酷い寒気に襲われていた。不思議な事には額に冷えピタまで貼ってあるではないか。

「えーつと・・・」

ここはマサン家、マサのベッド。昨日マサと呑んで、俺が勝手に潰れたんだよなあ。

「げっ、12時半?!」

「ナル、起きた？大丈夫か？」

時計の針に驚いた所で、ハーフパンツとTシャツといった出で立ちのマサが台所から盆を提げてやって来た。そういえば俺も同じ様な格好に着替えているではないか。マサがしてくれたのか？

「お前、完璧カゼ引いてんだよ。通りでおかしいと思った。雑炊作ったから喰って寝とけて」

優しい味の鮭と卵の雑炊は、食欲が無い胃の中にもすんなりと収まってくれた。

そういえばマサは昔から面倒見が良かったっけ。身も心も弱っている今の状態では、気を抜けばうっかり涙が出そうだ。

「ホント、ゴメン」

「らしくねえこと言ってねーで、早く寝て治せって」

言ってポンポンと叩かれた頭が熱いのは、熱のせいにすることにした。

その土日はすっかりマサの世話になり、月曜日の出勤には体調は元通りとなっていた。実際一人暮らしの身には風邪っぴきは辛い。ただこの看病は予想外の事態を引き起こしていた。

「え？ケンカですか？」

「そうよー。進藤さんと杏奈ちゃん。困るわあ、今日は同じルームなのに」

二個上の看護師の先輩が朝っぱらからばやいてきたのは、どうやらマサと彼女のケンカ騒ぎらしい。

「何ですか？マサとかあんま怒ってんの見たことないですけど」

「まあ怒ってんのは杏奈ちゃんの方なんだけど。なんか付き合って五年記念日を進藤君がドタキャンしたらしいわよ」

「へ？」

全くの初耳だ。じゃあなんだ。この連休、アイツは彼女との記念日すっぱかして雑炊なんか作ってたって事か？！

「何でも、自宅で風邪引いてる友達の看病してるからとか言ったらしいのよ。さすがに怪しいって言うか、どこの女連れ込んだのよってハナシで」

「・・・俺ですけど？！てかマサもちゃんと説明しとけよ！ああ、風邪は治ったのに頭が痛い。」

「てか第一、マサが浮気とかする筈ないじゃないっすか。あんなクソ真面目、そうそういないすよ」

「そうねー。遊び人の成海さんと違ってマジメよね」
「んなんっ?!」

なんだと?!確かに誰と付き合っても長続きはしないけど、それは一途の裏返しだったの。

「・・・まあいいですよ」 とりあえずマサに話を聞こう。そんなに必要なら俺からアイツの彼女に説明をしよう。それから

「別れた」

「へえっ?!」

思わず上擦ったマヌケな声を発してしまった。月曜日も時間が合わず、火曜日も俺が遅出で、水曜日はマサが準夜で、やっと時間が取れそうな金曜日。かなり延長したマサの付いた手術が終わるのを待ち、片付けも待ち、やっとロッカールームに入って来たマサの第一声がソレだった。

「どうしたんだよ。やっぱりこないだの記念日すっぱかしてケンカしたのが原因?」

「知ってたのか」

マサは俺が知らないと信じていたのか、心底驚いた顔をした。

「なあ、あれは誤解だって俺からちゃんと説明して」

「いや、いいって。きっかけはアレでも、それだけが原因じゃねーし」

「でも・・・」

片想いは辛いけど、別れたさせたかった訳じゃない。マサに辛い思いはさせたくないのだ。この複雑な男子の純情。

「整形の太田先生と付き合っただってよ」

はい?!一瞬で頭に血が上るのを感じた。

「俺といってもドキドキしなくなったんだと。五年記念を祝う筈だった日に太田先生に食事に誘われて行ったら好きになったらしい」

人事っぽく苦笑いで話すマサに掛ける言葉が見つからない。ヒデよ。太田なんてチビデブな上、オペも下手で嫌味で偉そうで。乗り換えたのも絶対『医者』っていう肩書き目当てだろ。マサ程いいヤツいねーのに。

「何でお前が泣いてんだよ」

「え？」

知らない内に涙が頬を伝っていた様だ。止めようにも、それでもなお溢れてくる涙を、俺はこの時止める術を知らなかった。

マサは入学当時から目立つ存在だった。身長が高くバスケが上手い、顔だつて男前の部類だろう。そのくせ浮いた話がない。だから女にモテた。ノリが良く話も面白い。だから男からも好かれていた。俺が大学でもバスケ続ける事になったのだって、マサがきっかけだった。

「ああっ！ドイツ語の訳当たってたの忘れてた！ヤベー間に合わねえ……」

「成海、どこ当たってんの？問4？俺、問3だったから問4もやってるけど、写す？」

元々、仲のいいグループが違った俺らが親しくなったのは、大学一年の春のそんな些細な会話がきっかけだった。

「マジいいの？じゃあ天津麻婆丼な」

その日の昼、お礼がてらマサと学食にやって来た。思えば初めて二人で飯を食べたのもこの時だろう。

「おう。何でも奢るよ。てか進藤って頭いいのな。和訳完璧だったし」

「全然アホだつて。高校まで部活しかやって来なかったからな」

「そうなの？何部？」

「小学校からずっとバスケ」

「マジで?!俺も!」

「マジ?!」

こんな感じで意気投合してしまい、テニスサークルとかでキャンパスライフを満喫するという俺の青春プランはアツサリと覆される。バスケ馬鹿二人は、結局大学でもブレる事なくバスケをする事になるのだ。

俺も多分女にモテないわけじゃない。女の子に好かれるのは人並みにも男だから嬉しくない訳がない。だけど付き合ってみればいつも同じ結果となった。

『どうせヤマトは男友達とバスケの方が大事だもんね』
今考えると大事なのはマサだった訳なんだが。

マサが入部したばっかのマネージャーに押し切られる形で付き合い出した時は、まだ俺も自分の気持ちに気付いていなかった。だから胸の辺りがやたらイタかった理由も分からずじまんだけ。

引退、就職、卒業を目前に気付いてしまった離れ難いという己の本音。押し込められていた『コイゴコロ』。

苦しい自分の心情とは裏腹なんだけど、マサの幸せを祈る気持ちも嘘じゃない。世間一般の幸せを俺がマサにあげる事は出来ないから、だからマサへの想いは一生隠しておくつもりだった。

マサには笑っていてほしい。苦しまないでいてほしい。それだけが真実だった。

(消えてしまいたい・・・)

彼女にフラれたと報告するマサの前で俺は号泣してしまい、いたたまれなくなり走って逃げ出した。驚いたマサは追っかけて来たが、振り切って原付飛ばして家まで帰って来てしまった。

(俺、キモいだろ・・・キモ過ぎる。絶対ドン引されてる)

ポケットの中で携帯が振動している。わかっている、さっきから続いているマサからの着信だ。

(会わず顔ねーって・・・電話とか、何しゃべりゃいいんだ)

押し込めてきた自分の気持ち露呈する事だけは避けたい。友達でいられなくなるのは一番ツライ。だから今だけはそっとしておいで欲しい。落ち着いたら言い訳を考えるから。

降り出した豪雨が追い打ちをかける様だ。原付で雨は辛い、せめて家に帰るまで天気もってくれたのがせめてもの救いか。

「はー・・・」

とめどない溜息の、何回目だろうか。溜息にあわせて玄関のチャイムが鳴った。そういえば実家から荷物を送ったと連絡があった気がする。こんな雨の中、ご苦労様ってハナシだ。

「はーい・・・」

目元が腫れぼったいのが気になるけど、何の気無しにドアを開ける。

「・・・ナル。お前、電話出るよ」

立っていたのは配達のお兄さん　ではなく、頭からずぶ濡れのマサであった。

「何で」

何でだ。マサはチャリ通だ。こんな土砂降りの中、自転車でこんなに遠くまで来たのか？というか顔が少し怒っている。いや、当たり前か。繋ぐ言葉が見つからない。

「何でじゃねーって。あれだけ泣かれて逃げられたらフツー心配するだろ」

「・・・ゴメン」

マサは優しい。誰に対してもとことん優しい。マサの顔が直視出来ない。

「風呂、借りていい？」

「え、ああ・・・」

シャツからもズボンからも水が滴る程のマサは、そのまま玄関横の風呂場へと直行した。そうしてシャワーの音が響く室内には、混乱した頭の俺が一人取り残された。

とりあえず、タオルと着替えを用意しよう。そして何食わぬ顔をして、シラを切り通そう。今後の関係に何も歪が入らないように。とにかく、冷静に・・・。

「ナル。風呂サンキュ」

頭を拭きながら、俺が用意したTシャツとハーフパンツで風呂場から出て来た。何でフラれたマサがこんなに冷静で、俺がこんなにテンパってるんだよ。

「ああ・・・」

「ナル」

「・・・」

「ナル！お前、今日どうしたんだよ」

「え・・・」

「心配すんだろが。あんな泣いて、急に帰られたら」

そう言っただけマサはベッドに座る俺の頭をクシャクシャと掻きまわす。そんなんされたら、ますます泣きたくなるだろ。

「お前は、フラれてシヨックじゃねーの？」

「え？まあ、免許の差ってデカイのなーとか思ったりしたけどな。不思議とそこまで。ちょっと予想はついてたしな」

「え、そうなの？」

「まーなー。それより、何でナルは泣いてたんだよ」

「う・・・それは・・・」

言葉に詰まる俺を見て、マサが噴き出す。

「ホンつと、どんだけ友達思いなんだよ！ ナルの彼女だった

ら、医者だからって乗り換えたりしねーんだろな」

苦笑しながらぼやくマサに思わず声を荒げていた。

「何言ってるんだよ！俺が！俺がマサの彼女だったら

「え？」

・・・ん？俺、今、何て言った？

『ピンポーン……』

タイミングが良いのか悪いのか、現実のチャイムが鳴り響く。

「悪い、宅急便」

立ち上がる俺の腕をマサが掴む。

「待って。逃げんの？」

「は？ち、違……離せつて、荷物届いてんだよ」

「ちゃんとナルが俺と、自分の気持ちと向き合っなら離す」

「は？何言つて……」

「ナル！」

『ピンポーン。ピンポーン』

「わかった、わかったから！いいから離せ」

マサの手を振りほどいて玄関へ走った。勿論扉の向こうには段ボールを抱えた体格のよい配達員がいた。

「ナル」

「……」

「ナル！」

「……」

マサの視線が痛い。

「大和」

「っ、何で名前で呼ぶんだよ！」

「お前が返事しねーからだろ」

そりゃ返事出来るかっての。どうにか気持ちが悪くならずやり過

すかで、こつちは頭が一杯なんだよ。

「ナルってさ・・・」

「ん？」

「俺の事、好きなの？」

「・・・ええつと？・・・えええーっ？！」

「」

その予想外の問い掛けに俺の心の壮絶な叫びは声にならず、ただただ鯉の様に口をパクパクとさせるしかなかった。

「どーなの」

マサが真顔で問い詰めてくる。

「べっ、別に・・・」

声が裏返る。ポーカーフェイスを保てない。自然と顔が俯いてしまふ。

「別に？」

・・・気持ち悪いとか思われんのか、今までの関係でいられなくなるのは絶対嫌だ。気を遣われるのもゴメンだ。

「大事な・・・友達だよ。スゲー大事。それ以上でも以下でもねーの。当たり前だろ」

マサはふつと息を吐き出すようにそつと笑った。その微笑の意味が俺にはよくわからない。

「わかった。じゃあもう寝るか」

「へっ?!お前、泊まってくの?」

マサは当たり前前の様に俺のベッドに潜り込む。

「お前は、その『大事な友達』をこの嵐の中、放り出すのか?」

今度はマサが勝ち誇った顔でニヤニヤと笑う。・・・クソ。振り回されるな、俺。幸い明日は休日だ。今夜は床で寝て、明日マサが帰った後でゆつくり寝たらいい。

「ホラ、ナル電気消して」

言つてマサは自分の入った布団を半分めくり、ポンポンと叩く。

「・・・まさか入れてることじゃねーよな」

「あれだけ雨に濡れたから寒い。ナルのせいな。ホラっ」

熱いまサの手が、俺の腕を掴んで強く引っ張った。

「うわっ」

バランスを崩して、布団に倒れ込む。思った通り、マサの身体は先程のシャワーですっかり暖まっていた。・・・確信犯だろ、コイ

ッ。

「オヤスミ」

マサはそう言って目を閉じると、程なく寢息を立てはじめた。俺はと言うと格好悪い話だが、横から聞こえる規則的な息遣いが気になり、ほとんど眠る事が出来なかった。浅い眠りが訪れても、マサの身じろぎ一つで起きてしまう。今までマサが泊まった事もマサの家泊まった事も勿論何度もある。が、こんな至近距離はなかった筈だ。少なくとも俺が自分の気持ちに気付いてからは。

何の不安もなさそうなマサの寝顔を見て、溜息をつく。第一、俺も男だ。こんな近くにいたら、違うイミでも正直ヤバイ。

「お前は人の気も知らないで。口に出せる程の、生半可な『好き』じゃねーの」

額を軽く叩いてみた。熟睡中のマサは当然無反応だった。

翌朝目覚めると、もうマサの姿はなかった。ごく丁寧に書き置きを残して。

『部活行くわ』

あのバカ、誘えよ。

結局、昨日の出来事もマサのあの問い掛けも、アイツの中では大した話じゃねーって事なのか。

「・・・もついい」

マサに顔を合わせるのも何となく気まずい。

「新しいバツシユでも買いに行くか」

今日は天気もいい。街に繰り出す事にした。

神様は意地悪か？

「先輩！こんにちは」

「・・・コンニチハ」

何も気にしてない風に、普段通りの挨拶をして来たのは、今俺の中の話題の中心人物。マサの元カノ。

「何してんだよ。太田先生とデート？」

「うわっ、何かヤな感じの言い方しますね。今日は一人で買い物ですよ」

別に他意はなかったのだが、本音が漏れ出てしまった様だ。だが、次に彼女の口から出た言葉は、俺が予想していないものだった。

「先輩、ちよつとお茶しません？」

・・・何で？

こんなモヤモヤした頭ではバツシユを買えず、結局俺は家に帰り、昨日実家から届いた野菜で晩御飯を作っていた。

鍋を火にかけながら、今日マサの元カノと入ったコーヒーショツプでした会話を思い出す。

『で、俺に何の話があんの』

『えー、なんか先輩冷たくなった。マーくんがどうしてるかなって思ってる』

『どうもこうも、別に変わんねーよ。ドクターに乗り換えたお前が心配する必要ないんじゃないかね？しかも太田だろ。訳わかんねーし。俺に聞くのもおかしいと思うけど？』

『なんか言い方にすごいトゲありますね！太田先生、ああ見えて実はすごい優しいんですよ』

『知らねーって。第一マサだつてめちゃくちゃ優しいだろうが』

『マーくんは優しいし大切にしてくれたけど、最後まで私を一番好きにはなってくれなかったですよ』

『は？意味わかんないんだけど』

『5年前私がマーくんに告白した時、言われたんですよ。叶わない人に恋してるから、一番好きにはなれない。ゴメンって』

『叶わない人？』

『そうですね。それで二番目でもいいですからって言って無理矢理付き合ってたんですけどね。やっぱり私を一番好きになつてくれる人が現れたら、それは嬉しかったんですよ』

『・・・それでも、乗り換えた事には変わりねーだろ』

『別れようって言った時のマーくんのアッサリした態度、先輩にも見せてあげたかったですよ』

何だよ、叶わない人って。聞いた事ねーっての。

「俺だったら、二番目は嫌だ」

鍋の中の豚バラとジャガ芋が、照りが出ておいしそうに色づいてきた。

そこに突然のメール着信音が鳴る。マサだ。

「ナル、今日杏奈といた？」

あのコーヒーショップにいた時、見られてたのか？脱力感を覚える。

「アイツは・・・」

もうそれには触れないで、返事を送ってやった。

「お前、他にずっと好きな子がいたのか？」

迷ったけど、送信ボタンを押した。こういう時、メールというのは一方的で便利だ。今の時代、告白も別れもメールというのも何となくわかる気がする。

そう思いながらどんな返事が来るのかと少し不安になっていると次に携帯から鳴り響いたのはメール受信音ではなく電話着信音だった。

「ん?!」

ディスプレイに表情された名前はやはり、マサ。

「居留守、って訳にはいかねーよな」

やはり電話となると多少なりとも緊張する。

「モシモシ」

「あ、ナル？何だよさっきのメールは」

「やっぱり・・・。しかも少し声が怒ってる？」

「いやな、今日買い物に出掛けたらたまたまお前の元カノに出会ったんだよ。そんでそんな話に・・・」

「ナルには関係ないだろ！俺のいない所で杏奈とナルがそんな話するの、気分悪い」

怒ってる。そりゃ内緒にしてた事を、元カノからバラされたら怒るよな。

「ゴメン」

「何で俺が怒ってるかわかってる？」

「え？だって、マサが内緒にしてた事を俺が勝手に……」

マサは電話口で大きな溜息をついた。

「もういい」

「えっ、ちょ……」

電話を切られてしまつと思ひ、引き止めようとする、マサは全然別の事を口にした。

「メシ、まだだろ。食いに掛ける？」

「あ……悪い。今作り中で……」

「マジで？珍しいな。俺の分、ないの？」

まさかそう来るとは。やっぱりアイツも別れたばかりで人恋しいのか？

「煮物だから沢山ある。……ビール買って来いよ？」

「ああ」

こんな状況でも、やっぱりマサと会えるのは嬉しかった。

30分後、コンビニの袋を提げたマサがチャイムを鳴らした。

「オジヤマしまーす。お、なんかいい匂いする」

先程の電話での怒り声と打って変わり、上機嫌な様子だ。

「煮物と味噌汁と白飯、あと納豆。文句ねーだろ」

「十分。スゲーな」

マサと囲む暖かい食卓。俺の中であらぬ妄想が膨らむ。イヤイヤ。それより、さっきの話を、もう一度ちゃんと謝ろうと思っていたんだ。

「・・・なあ、今日はゴメン。元カノに余計な事聞いて」

マサが不機嫌になるのを覚悟して切り出した。するとマサは今度は困った様な顔で笑った。

「もういいって。どうせ杏奈が無理矢理付き合わせて勝手に喋ったんだろ」

もう怒っていない事ホツとはするが。それより何か、あの子とわかり合えている感じがムカつく。別れた元カノにまで嫉妬してしまう。

「なあ、二番目でも、やっぱりあの子も好きだった？」

「・・・じゃあナルはいつも一番好きな子と付き合ってた？」

俺の問には答えず、逆に痛い所を突かれた。俺は多分無意識でいつも一番はマサだった。

「そうだな。違つかも」

「だろ」

何が『だろ』かはわからない。ただ一番聞きたいマサの叶わない思い人が誰なのかという事は、口に出す事は出来なかった。

その晩もマサは泊まった。寝返りを打ったマサが抱き着いてきたまま眠っていたので、俺はまた眠れなかった。

眠い月曜日。いつもの朝カンファレンス。

今日のオペは、眼科の局麻、か。マサは・・・スパイン？じゃあ執刀医は太田じゃねえか。しかも外回りの研修でマサの元カノも入んの？！上も考えて組んでやれよ。

「ナル、シワ寄ってる」

横に立つマサが小声で言っただけで自分の眉間を指さす。

「あ・・・」

「もしかして俺の心配してくれてた？」

「へ?!別にっ・・・いや、まあ・・・」

妙に歯切れ悪くなってしまふ。この間からどうも調子が狂っている。

「俺ならダイジョーブ。じゃ、入り口まで患者迎えに行くか」

カンファが終わり、マサに背中を押される。

「ああ・・・」

溢れ出しそうなグチャグチャになった感情を抱えて歩き出すと、すぐに腕を掴まれてよろけそうになった。

「な、何だよ。マサ？」

俺の二の腕を引いたマサは耳元で短く囁いてきた。

俺がずっと好きなのは、ナルなんだけど？

「えっ?今、何て」

マサの事が好きで、好きで、好き過ぎて。そのせいで耳がおかしくなったのか？

「4時間半後、オペ終わるから。昼にでもナルの気持ち教えてよ。言っただけでマサは笑顔で入室した患者の元へと行ってしまった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9183y/>

270分

2011年12月11日22時49分発行